外国にルーツを持つ学生はどのように進路を選択するのか　－東京国際大学の事例から－
The Career Path Choices of Students with Foreign Roots: A Case Study of Tokyo International University

首藤 佳世（東京国際大学 JLI 非常勤講師）
SUTO, Kayo（Part–time Lecturer, Tokyo International University）
津田 麻美（東京国際大学 JLI 日本語専任講師）
TSUDA, Asami（Lecturer, Tokyo International University）
谷津 裕子（関西外国語大学・元東京国際大学 JLI 日本語専任講師）
YATSU, Hiroko（Kansai Gaidai University, Former Lecturer, Tokyo International University

キーワード：外国ルーツ、大学、進路選択、日本語支援、複数言語話者

1. 研究動機

東京国際大学（以下、本学）には、英語で学位を取得する E トラックと、日本語で学位を取得する J トラックが併設されており、日本語科目は E トラック生を対象に開講されている。履修生の中には、本学に入学する以前に日本国内の小学校、中学校、高等学校、インターナショナルスクール等の外国人学校に在学していた学生が散見される。一定の滞日年数を経ている学生は、一般的な留学生とは大学進学に至る過程も、それまでの日本語学習の環境も異なることが多い。教員が個々の背景を知り、学内外の教師や学校関係者、同じような背景を持つ後輩たちやその保護者と共有することで、学習面でも進路選択の面でも効果的な支援につながると考えた。

2. 背景

文部科学省の「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」によれば、全国の公立小学校・中学校・高等学校で日本語指導が必要とされる児童生徒数は増加を続けている。このような状況下で、東京都では 12 校の都立高校が、埼玉県では 12 校の県立高校が、外国人を対象とした特別入試を実施しており、これらの高校の進学実績を見ると、本学に合格者あるいは進学者を輩出している高校が多数ある。

大学進学において、通常の留学生枠とは別に外国にルーツを持つ生徒を対象とする入試を実施している大学は、関東では宇都宮大学と東洋大学の 2 校にとどまるが、関西では実施大学が微増している。外国にルーツを持つ生徒の増加と、若年人口の減少が同時に進行する社会状況に対応した取り組みが少しずつ広がりを見せつつある。しかしながら、新しい取り組みであるが故に、外国にルーツを持つ学生の背景や日本語学習を掘り下げた研究蓄積はまだ少ない。

日本における外国人の進学問題といえば高校進学に限定されていたが、大学進学も現実的な課題となっている。外国にルーツを持つ生徒を対象とした入試制度を実施していない大学では、外国にルーツを持つ生徒は何らかの既存の入試制度で入学し、「不可視の存在」となる（樋口・稲葉、2018）。今後も外国にルーツを持つ生徒の大学進学が増えることが予測され、大学がどのようなサポートができるのか、できないのかを判断して、責任を持って社会に送り出す必要性が指摘されている（木村、2024）。

3. 研究課題

将来的に大学での教育・サポート活動に活かすことを目的とし、外国にルーツを持つ学生がどのような経験を経て本学に進学したか、将来のキャリア形成にどのような意識を持っているかを明らかにする。

4. 調査分析方法

本研究は本学の研究倫理審査の承認を受け、2024 年 10 月に調査を開始した。具体的には、日本で小学校・中学校・高等学校のいずれかに通った経験がある学生 10 名に半構造化インタビューを実施した。日本語クラスを担当する教員を通じてインタビュー協力者を募集し、9 名は日本語、1 名は英語でインタビューを実施した。インタビューは録画・録音し、文字化したデータを基にオープンコーディングを用いて、回答者の比較分析を行なった。インタビュー対象者の概要は表 1 にまとめる。

インタビュー項目は以下を中心とした。

- 母語や日本語、その他の言語との関わり
- 日本社会での経験

- 進学先を選択した経緯
- 学んだ知識や経験を将来どのように活かしたいのか
- 教員にどのようなサポートを期待するか
- 同じような背景を持つ後輩や保護者へのアドバイス

表１　インタビュー対象者　＊所属欄のＪはＪトラック、ＥはＥトラックを指す

所属	出身国	来日時期	滞日年数	日本で通った学校	家庭内使用言語
J	フィリピン	小3	10年	公立小、公立中、公立高	日本語
J	中国	9歳	10年	公立小、公立中、私立高	中国語　日本語
E	フィリピン	18歳	5年	公立高	日本語　フィリピン語
E	インドネシア	0歳	23年	インドネシア学校（小中高）	インドネシア語
E	ネパール	中1	8年	公立中、公立高	ネパール語
E	ベトナム	高1	6年	私立高	ベトナム語
E	ネパール	0歳	10年	公立小	ネパール語
E	フィリピン	12歳	8年	公立中、公立高	英語　フィリピン語
E	パキスタン	0歳	8年	インター（中高）	ウルドゥ語　英語
E	フィリピン	5歳	18年	インター（小中高）	フィリピン語　英語

5.　結果

10名全員が3〜4言語を使用する複数言語話者で、滞日年数は5年から23年と多岐にわたっている。10名の中には、日本語に不安を感じてＥトラックを選択している学生が多く、本学のＥトラックの存在が大学進学の機会を広げていることが明らかになった。一方で、日本語能力検定試験N1取得者3名、N2取得者 1 名は、将来のキャリア形成を視野に入れ、大学では英語のスキルを高めることを目的に主体的に Ｅ トラックを選択している。9 名が卒業後は外資系企業を含む日本での就職を希望しており、本学外国ルーツ生の日本における就職希望率は非常に高い。

教員からのサポートに関しては、就職活動のタイミングで敬語使用への不安を提起する学生が目立ち、同僚、上司、顧客とのコミュニケーションを円滑にとるための日本語支援が求められていることが明らかになった。また、キャリアセンターのスタッフが履歴書や面接指導を含むサポートを行なっていることを評価する声が多かった。小・中・高校では、やさしい日本語の使用、テストを英語で受けられるなどの言語的配慮を望む声が多い一方で、言語以外の配慮として、「言葉ができないからと言って無視しないで欲しい」「先生が自分に優しくしてくれたことがクラスメートと馴染むきっかけになった」などの言及があった。

後輩へのアドバイスは、日本語習得に関することが多いものの、インタビュー対象者が日本語習得に至る過程は様々で、外国ルーツ生と一括りにできない多様な個人経験がある。その背景から、「最大限努力する」「やりたくないことは無理しないで」「自分で決めることが大事」など、後輩達それぞれの選択を尊重し応援する気持ちが感じられた。

本調査を通じて、本学の Ｅ トラックに外国ルーツ生が存在することが可視化され、一般的な留学生とは異なる学習背景とキャリア形成への意識の一端が示された。学習面では言語的配慮と言語以外の配慮の必要性が示唆され、後輩へのアドバイスからはキャリア形成を考える上で主体的な選択をして行動する姿勢が浮かび上がった。

【参考文献】

樋口直人・稲葉奈々子,2018,「隙間を縫う-ニューカマー第二世代の大学進学-」『社会学評論』68(4) 567-583
田巻松雄,2020,『宇都宮大学 HANDS10年史-外国人児童生徒教育支援の実践-』第10章
村上一基,2024,「私立大学における外国にルーツを持つ生徒対象入試-東洋大学社会学部国際社会学科の事例から」『多様な学びの場をつくる』第４章，明石書店